遠
華矩

378

凡物之於天地間也○有體必有用○體出乎天○用成乎人○體用備而其功全矣○是故百花千草之生於山野陂澤者○天也○擬其秀芳移於通邑

大都以挿之瓶筒。陳之高
堂請序。而供観玩者人也。
物體人間相須而共功全焉。
可謂至矣。感鬼蒼紫田先生。
夙有観於茲。暇日寫心挿花。

乃采香葩芳草而挿之。其
於内背偃横。倚昂長短。向
態参差。儼合理析。謂巧極
變。刻意不厭。究令如在山野
陂澤然。蒼而有知則常先生

之賜實爲不鮮矣。乃者擇其
門生所揷者百餘瓶。以圖寫
之。嘗示同好。蓋皆先生之擬
定也。同好之徒。觀以取法。其
豈不亦裨益乎。先生平常

好讀書。勉强不苟。必得意會
而後已矣。傍精于茶理及賞
香。口訣祕事無所不究。如
花技亦固緒餘耳。人其勿以
緒餘相先生云。

平安　川越省邦之直撰

自序

蓋予嘗云導插花法有漸有頓漸者何也使漸進技而使至所當至是也頓者何也

不待技進而使至所
當至是也其所當至
者何也盡以祕悉傳
之是也予也導之以
頓也故學之七日則
得至所當至也曰得
至所當至則得之雖
然非以漸則技不成
技不成則雖已知所
當至而不能至矣譬

之如已知至彼岸而
不得舩筏矣如何曰
不然彼岸是猶埻的
舩筏是猶弓矢假令
得舩筏未知彼岸則

乘之為何已知埻的
則莫不有不射之射
而不中乃務以不倦
則遂至莫不中矣是
故導之以頓則漸從

而成以漸則何日至
於頓矣則手之所以
導之以頓也今此擧
也出手之所導者故
誌其所以以爲序

文政戊寅季秌江戸
感鬼菴紫田宗碩書
弓宗師旅寓

附言

一 挿花の法ハ花葉ハ陰陽乃成数ニ應し
枝條ハ句曲の自然ニ随ひ是を象るに
之を為す所ハ造化乃美の美を盡すを
表すこれを能為すに至るその八
天地人の法合して三五十の度 口傳
正しきに出るなり天地人の法各五段なり凡て

十五段あり十五段 皆正輔あり正ハ
各一にして輔ハ計へかたし三才の
正輔花葉の陰陽枝條乃句曲此
三の者盡くされハ千山万水
をも一瓶ニ縮累す予か門人挿花
の若干瓶を法手技亦従ふを
えらみ桜木に写し此書の後

進に旋幟をまなく手技中心に
熟するとその中ハ秘密七法を附屬
是七法と称する者ハ、其一清平雅相
其二風流雅觀、其三玄緣兼備
其四天機手法、其五洽液奇法
其六復榮幻法、其七撓枝妙法なれ
其うち其中洽液奇法乃二三を

志家して予か門人初入の階梯とす
一 近世揷花を指南するものの徒多し皆會
序を設け數額を連ね表に古雅の
流名を題して諸人の觀歡をかける者
予これを見るに流名と揷花と盡く
相違せり然られハ其師たるものも
口にハ古雅の流名をいへともいまた其

流の蘊奥を学ひ得ずして諸流乃法
をよく得をこの先生をうらむるなり
門人を惑路にみちびき古雅の流名
を恥しむる拙の文挿なりし者予ハ
遠州流の蘊奥を究め毫も他流を
まじへずして正しく流れを門人に導く
なり 猶手前 點茶 挿花の三法

を詳に書集め五巻の書となし
此書を乾坤と名づけ世に公にせり
此道にこゝろざし深からん人ハ参見
し玉ふとも補あるへし

江戸 感兎庵富田宗碩 誌

蓮

明礬細末五分清水一升ニ攪和し須臾静定し上清一合をとりて此河種一トを壓入し器械（俗ニ水鉄砲ト云）を以て薬液を切口より活蓮せしむ

川骨

川骨根を製し出し製法のごとく道具を以て活蓮せしむ

竹

節ふしをつらぬき盧眼石一匕清水ニ攪和して活蓮せしむ

蕉

断茎を打碎き酒を沃き焼き插花瓶に水を用ひほして湯を用

朝皃

断茎を一尺許輪のごとくめぐらし瓶内に没し插終果て瓶中に湯を満しむよろし

萩

土上に安き蓆莚を覆ひ手引湯を以てかけもの上より捲きつけ置よろし

此外草木養花乃秘傳
數多し右の五六ヶ條も
含蓄一要所乃る全し
志のし凡て人身の毛竅より
呼吸溫暖乃氣液升發
する草木も亦然り極小治液攪
枝の法を索むれ是も手掌
より升發する溫暖乃

氣限小草木枯解ゝ必花ハ
忽ち花凋み葉枯るなり
予ゕ口傳乃治液等法の
養葉を用て插すなりとも
蓮 川骨 牽牛花の弱葉なり
是も三十日のうる全し 口傳
門人執心ふかくして花
の蘊奥を傳ふべきのみ

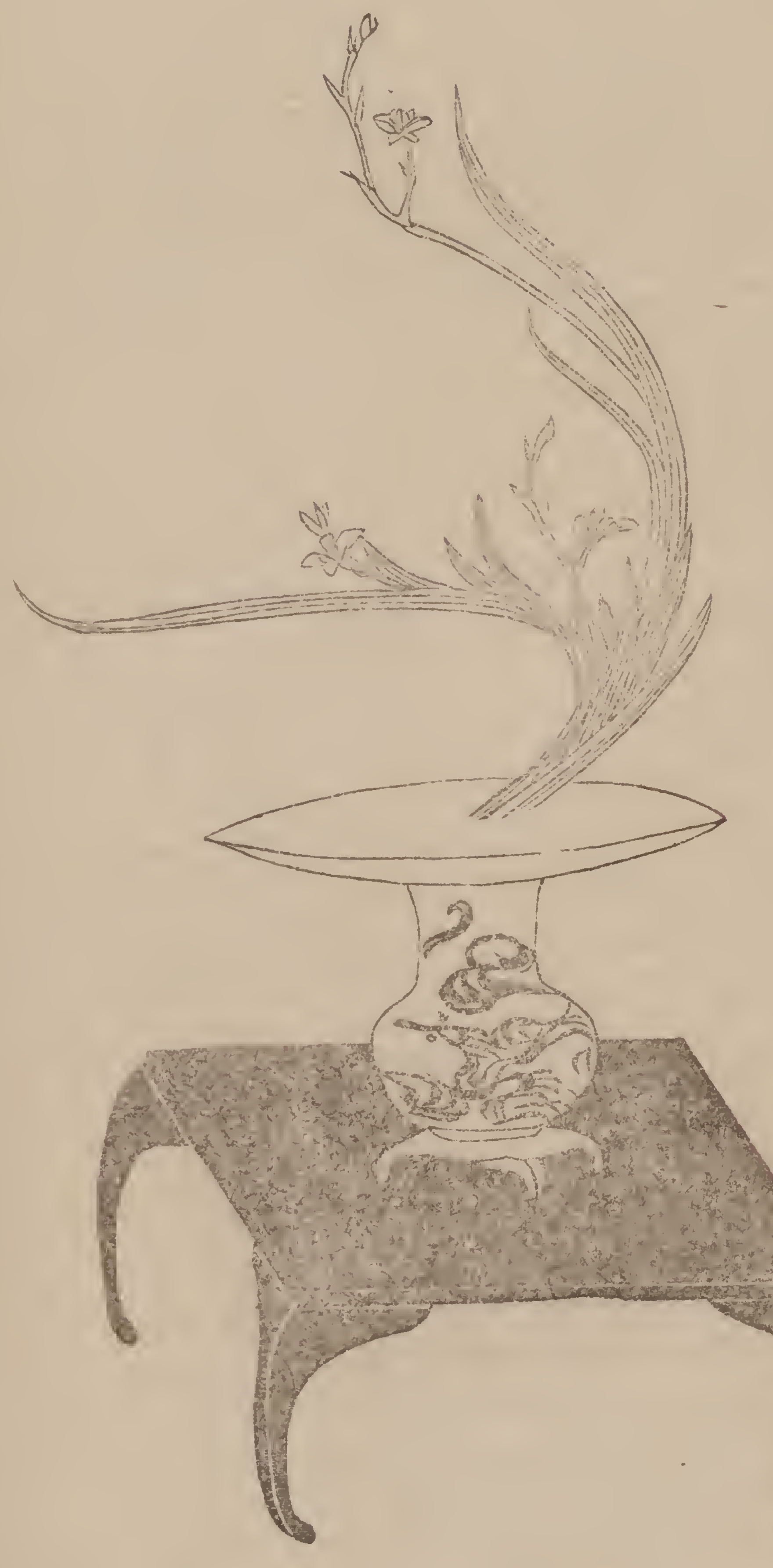
福壽草

僧由卜

松竹春

小林千切

著莪



中島　亀偶

梅

橋本　甯碩

桃

比良　花僊

玉簪

中川　可柳

菊
佐川眞泉

梅
中島亀偶

櫻
前田 素暁

万年青
初田 亀柳

菊
紀伊馬 月映

川骨
橋本

牡若

高谷 吾伯

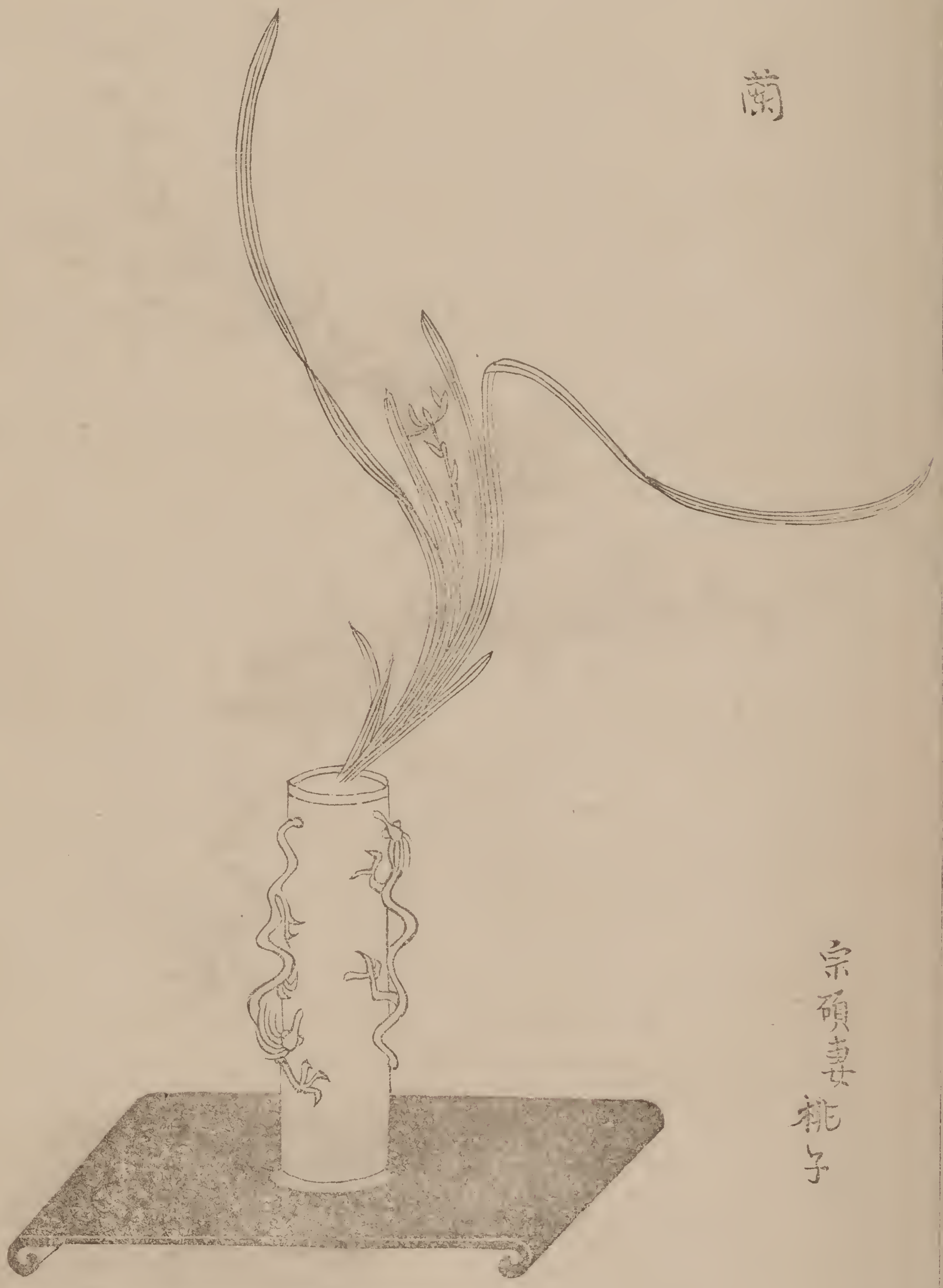
櫻

中嶌 棠齋

菊

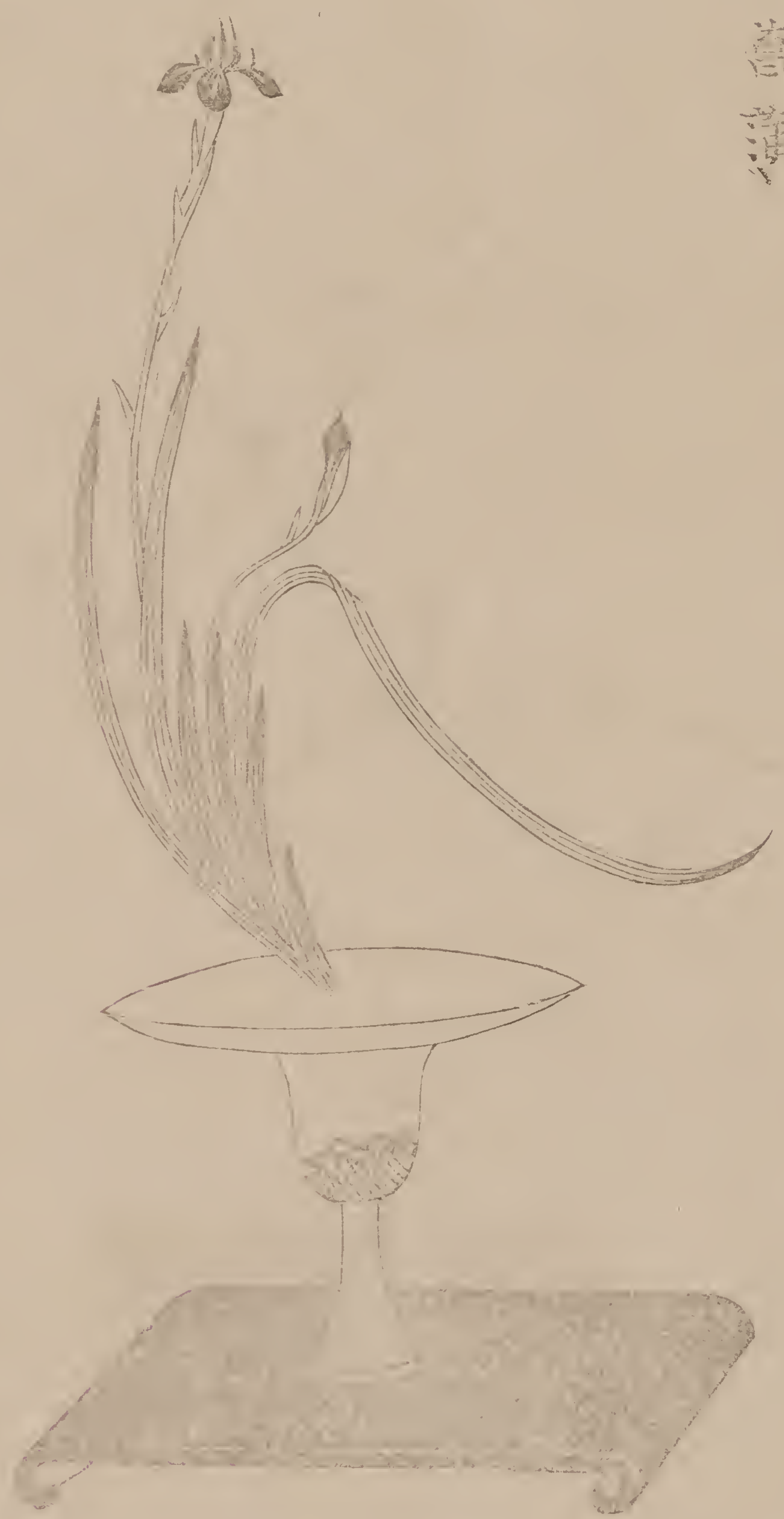
川越左門

蘭



宗碩妻桃子

菖蒲



山尾仲業

杏

初田亀柳

杜若

水仙
僧 外巳

柳菊

龍本 文古

牡若

比良 苔僊

連翹

中塚悠雅

菊

平出桃亭

竹菊

岡本久馬

馬藺

中嶌榮齋

菊
松陵 芝蘭

牡若
鵜野 蘭松

万年青

橋本　董碩

椿

岡本　文齋